

スクミリンゴガイ防除対策資料

○ 新発生地域を増やさない対策

◆ 既発生地域から未発生地域への人為的な貝の移動防止

項 目	対 策 等
農作業受託の作業時には発生ほ場を確認の上、細心の注意を払う	<ul style="list-style-type: none"> ・貝の既発生地域（ほ場）、未発生地域（ほ場）を把握の上、<u>貝が移動しないような対策を事前に検討する。</u> ・既発生地域で使用した農業機械、資材等は作業後には十分洗浄する。 ・作業実施時のほ場の順番を検討する。
貝が混入した土の移動を避ける	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場整備等、既発生地からの<u>土の移動</u>を伴う危険がある場合は、<u>対策を講じる。</u>
未発生地ではスクミリンゴガイを活用した雑草防除に取り組まない	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>未発生地では絶対に取り組まない。</u> <p><留意事項></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施する場合は、周辺の水田耕作者の理解を得るよう話し合いをして同意を得る。 ・当該水田以外に貝が逃げ出さない等の措置をとる。 ・当該技術による栽培を中止する場合は、自らの責任で貝を適正に駆除する。
不用意な取り扱いを避ける (観察、エサとして利用の場合)	<ul style="list-style-type: none"> ・貝を移動しないよう種々の機会において一般住民も含め<u>啓発活動</u>を行う。 ・学校や一般住民にも貝について周知徹底を図る。 ・収集した貝は自らの責任で適正に駆除等の処置を行う。

◆ 事前対応(同じ水系で発生等により特に警戒が必要な場合)

項 目	対 策 等
啓発活動等の実施及び早期対応可能な体制を整備、	<ul style="list-style-type: none"> ・貝の特徴等をパンフレット等により関係者に<u>周知徹底</u>する。 ・仮に侵入があった場合、周辺ほ場でも早期に発見し早急な対応ができるよう<u>体制を整備</u>する。

○ 既発生地域の対策

◆ 可能な限り事前に検討すべき事項

項目	内容	理由
ほ場の畑地化	麦やダイズ等を作付ける輪作体系により水田を乾燥化させ、貝を減少させる。	スクミリンゴガイはタニシに比べ殻が薄く乾燥や耕耘による機械的な破砕に弱く、畑地化により密度が低下する。

◆ 水稲を続けて作付けする場合の時期別の検討事項

時期	項目	内容	備考
秋期	石灰窒素の施用	水稲収穫後(水温 15℃以上)に 3～4 cm に湛水し、1～4 日後、石灰窒素(20～30 kg/10a)を全面に散布し 3～4 日放置する(漏水を防止する)。 《※施用は秋期または田植え前に 1 回のみ》	次年度の植え付け時には元肥の調整が必要
冬期	ほ場の耕起	厳冬期に 2 回程度耕起する。	
田植え前	石灰窒素の施用	荒起こし後、3～4 cm に湛水し、3～4 日後石灰窒素(20～30kg/10a)を全面に散布し 3～4 日放置後に植代を行う(漏水を防止する)。 《※施用は秋期または田植え前に 1 回のみ》	植え付け時には元肥の調整が必要
	中苗～成苗の移植	食害されにくい中苗～成苗植えにより被害を防ぐ。	
田植え時及びそれ以降	薬剤の散布	キタジンP粒剤、パダン粒剤4、スクミノン、スクミノンベイト3、ジャンボタニシくん、メタレックスRG粒剤、パダンバッサ粒剤を散布する。	
	苗の浅水管理	田植え後 3 週間頃まで苗を 1 cm～2 cm 程度の浅水で管理する。	
	貝や卵塊の捕獲	水田内や用水路等で捕獲し、圧殺、焼却処分する。	